

藤原清衡と「平泉思想」

伊藤博幸[※]

はじめに

平泉研究において、奥州藤原氏の初代清衡が開いた「都市平泉」をなぜ「平泉＝ひらいずみ＝へいせん」と言うのか。これが筆者が最初にいただいた疑問であった。従来、平泉地名は所与のものとして、藤原清衡当初からあったとするのが通説的理解で、それ自体を問うことさえ行われてこなかった。

ところで、時の朝廷や為政者あるいは地方の権力者は、自らの新しい支配地に「嘉名」（縁起の良い地域の名称＝地名）をもって命名する事例が多い。

例えば、織田信長が稲葉山城を改めて「岐阜城」としたのは、「周文王起二岐山一、定二天下一」に由来するといわれることは夙に有名である。勇ましく、縁起の良い地名に改称した例である。また、古代の蝦夷支配の拠点となった「多賀城」は、中国や日本出土の古鏡の銘文「四夷服、多賀国家人民息」（中華思想にもとづき、蝦夷（四夷）を服属させ国家に安寧をもたらすの意）に由来するといわれる¹⁾。まさに目的に沿った名称といってよい。大宰府が同様に中国古代の官名「大宰（王を佐けて国家を治めることを掌る意）」に由来することと対をなす（いわゆる西の大宰府、東の多賀城と言われる由縁でもある）。このように、地名の命名行為は、単に嘉名の付与というだけでなく自らの土地への権威付けにもなっていることに注意すべきである。

すなわち、12世紀初めに藤原清衡が新たな拠点として選地した広域衣川の南端の地に「平泉」と命名した理由を知りたい。これが本稿の動機でありテーマである。

1. 平泉地名をめぐる学説史

（1）広域衣川が存在について

はじめに、平泉以前の当地の地名について確認しておく。奈良時代まで当地一帯が「衣川」²⁾と呼ばれていたことは、関山中尊寺のすぐ北側を河川衣川が東流して北上川に注いでいることから明らかである。すなわち当時の奥六郡一帯の郡域は主要河川を取り込む形で郡が形成されているからである。磐井郡の中央を磐井川が、胆沢郡の中央を胆沢川が、和賀郡の中央を和賀川が流れるという形態をとり、元来、河川は境界にはなっていなかった。すぐれて奈良時代的あり方を示すといえる。

※ 岩手大学平泉文化研究センター

1) 平川南 2012 『東北「海道」の古代史』岩波書店 pp.34-42.

2) 衣川の史上の初出は、『続日本紀』延暦8年（789）3月9日条の「勅征東將軍曰。省比來奏狀。知官軍不進。

猶滞衣川。」である。なお、後述の形態は蝦夷郡といわれる閉伊郡においても同様で、郡内を閉伊川が東流して宮古湾に注ぐ。

河川衣川が政治的事由で岩井郡と胆沢郡の境界域になったことは、時代も下って、10世紀初頭以後のことである³⁾。しかしそれでもまだ「平泉」地名は成立していないと解される。中世和歌の中で、みちのくの歌枕に「衣川」が頻出しても、「平泉」が一例もないことは、この間の消息を物語っていると解されよう。すなわち10～12世紀初頭頃もまだこの地は、河川衣川を挟んで、北と南に「衣川」地名があり、したがって、史料に登場する関の名も「衣河関」や「衣関」と紛らわしい関名が複数個所にあると推定されることにもなる⁴⁾。ここにおいても関山中尊寺とはいっても「平泉関」という事例はない。

(2) 平泉地名研究小史

藤原清衡がいつ頃この地の南端に、ことにことわって「平泉」と命名したのか。ここでは平泉地名の研究小史を、以下の課題と目的に沿うかたちで整理していく。

a) 平泉地名の謂れ(由来)について。b) なぜ当地を平泉というのか。c) それは最初からあった地名か。d) その読みは、の4点である。

課題a)の平泉の語源、意味、命名の契機では、最近まで民俗学的研究が先行していた。すなわち江戸時代以来伝承されてきた、「泉酒」「酒之泉」由来譚、平地に泉が湧き出るところからの命名、また、慈覚大師が骨寺村平泉野にあった寺を中尊寺に移したとする平泉野本源譚などである⁵⁾。

このような従来の民俗学的地名伝承譚に対して、平泉地名問題を歴史的考察の対象とするようになるのは、1987年以降のことである。太田静六氏は『寝殿造の研究』の中で、「藤原氏三代が栄えた平泉という地名については、今まで誰もふれておられないが、これは盛唐時代の東都・洛陽の郊外にある別荘地で、唐の宰相李徳裕がここに別荘を営み、『平泉山居戒子孫記』を残したので知られる唐の平泉に因んだものと私考される⁶⁾」と、はじめて平泉地名問題を李徳裕(787-849年)の別荘地との関わりで取り上げた。ここに課題a)・b)に対する歴史的地名問題を含めて研究分野としての「平泉思想論」の端緒が開かれた。しかし一方では、その意味も含めて研究は深化されなかった。

1993年になると課題a)・c)・d)を見通した見解が表れる。高橋富雄氏は『図説奥州藤原氏と平泉』と『平泉の世紀』において、i) 清衡以前、岩井郡に平泉の地名がなかったばかりか、江刺郡豊田館からの移転とともにこの地名が命名されて、その宿館を平泉館と呼んだのもないこと、ii) 移転当初の清衡館は岩井営のように呼ばれたと推定できること、iii) 岩井営が平泉館と呼ばれるようになる時期・理由については、清衡晩年の中尊寺を中心とする黄金文化が、(政治・行政・経済上の拠点となった=私註)岩井府を花の都のように飾り、柳営また花の御所のように讃えての名であろうこと。iv)

平泉館の由来も同様に著名な唐宰相李徳裕の別荘「平泉荘」に倣ったもので、平泉荘から平泉館へ移行したものであろうこと。v) 平泉館ははじめ漢音ヘイセンのタチで、次第にヒライズミのタチと変化したと考えられること、vi) 平泉は平安であり、長い戦いをおさめとる平安の泉の願いが込められていること、vii) 清衡の「平泉理想」が形となって表れたのが、「中尊寺落慶供養願文」であり、それは聖都構想に通じること、などを指摘した⁷⁾。清衡以前、当地に平泉地名はなく、平泉館と呼ば

3) 伊藤博幸 1999 「奥六郡成立の史的前提」『岩手考古学』第3号 pp.43-54。伊藤博幸 1999 「鎮守府領と奥六郡の再検討」『古代蝦夷と律令国家』高志書院 pp.109-132。

4) この段階の関名については、菅野成完 1999 「奥六郡の関と津」『古代蝦夷と律令国家』高志書院 pp.133-165. 参照。

5) 江戸時代における地誌等を紹介しながら、平泉地名の民俗学的研究については、千葉信胤 1992 「平泉の地名」『奥州藤原氏と柳の御所跡』吉川弘文館 pp.93-105、同 1996 「平泉地名研究の諸問題」『月刊考古学ジャーナ

ル』第407号 pp.22-26、同 2007 「平泉余話—その民俗を知る手がかりとして」『アジア遊学—東アジアの平泉』第102号 pp.22-33. がある。

6) 太田静六 1987 「平等院鳳凰堂の源流」『寝殿造の研究』吉川弘文館、所収。ここでは新装版(2010) pp.264-281. によった。

7) 高橋富雄 1993 「総論 藤原四代—五 平泉衣裳学」『図説奥州藤原氏と平泉』河出書房新社 pp.44-51。高橋富雄 1999 『平泉の世紀—古代と中世の間』日本放送出版協会 pp.30-45。

れる時期も清衡晩年であり、その由来も李徳裕の別荘地平泉荘に倣ったものとする。太田氏と同様の指摘である。高橋氏は平泉の読みは当初ハイセンと音読みだったとするが、この見解は卓見である。1999年には、課題 a) の平泉の意味について、佐々木邦世氏が仏教史的観点から取り上げ、「池の鏡のような水面は、仏教的に解釈すれば、泡立たない、平らかな寂浄の境地の表徴」とすることができるとした⁸⁾。以上が、80年代後半～90年代の研究史である。

2001年には、前川佳代氏によって、課題 a)・b) のかたちで平泉地名の命名は、平泉の苑池的性格に基づくこと、それは『平泉旧蹟志』の起源譚のいうとおり、「平らな泉の湧き出る場所」であり、これは中唐宰相李徳裕の別荘「平泉荘」の語源と同様であること、そして唐代「平泉荘」については、中唐詩人白居易（772-846年、字は楽天）などの文人が詩を残しており、詩文から平泉藤原氏がその存在を知った可能性は十分にありうると考えた⁹⁾。中国文学界では、李徳裕と平泉荘の関係、あるいは白居易と平泉荘の関係は周知の事実であったが、前川氏は改めて平泉問題をわが国の歴史的舞台に呼び戻した研究者といえよう。

2003年、小野祐貴氏も『東国平泉』を著し、平泉の由来について考えている。唐代の詩人白楽天は洛陽の郊外の平泉に何度も訪れていた。そこは古来、詩聖人も憧れた風光明媚な地で、宰相李徳裕の平泉荘や山水を愛する人々の別荘もあった。そしてわが国に将来された白氏文集は京の貴族に広く愛誦され、その中に登場する平泉という言葉が東国の地に導入されたと推測した¹⁰⁾。しかし一方で清衡平泉の命名は越前の白山平泉寺に因むとも考えている。これも課題 a)・b) に係る見解である。

このような動向の中、課題 a) について中国側文献を用いてその根本からはじめて明らかにしたのが、2013年発表の藪敏裕氏の専論「平泉起源考」である。そこでは先学が取り上げた李徳裕の詩文を詳細に検討し、i) 平泉山荘の名称は、山下の平坦な土壌から泉が湧き出ること由来すること、ii) それは平泉と呼ばれた溪谷の総称であり、歴代の多くの宰相経験者の別業があったこと、iii) 平泉山荘が『穆天子伝』所載の崑崙山の山頂にあるという平泉と同名であることを嘉していること。そして別荘の湧泉は、(泉の色の变化で) 吉凶を教えてくれる神泉であるとされていること、iv) 洛陽城内の白居易(邸宅は履道里にあった)は、平泉でしばしば酔遊し、平泉に強い愛着を持っていること、v) わが国における白居易は、文人としてだけでなく、浄土世界へ導く偉大な文殊菩薩の生まれ変わりとして将来されたこと、vi) わが国では、『白氏文集』が白居易像に大きな影響を与え、「中尊寺落慶供養願文」(藤原敦光起草)にも白居易の影響がみられること、vii) 李徳裕の詩文で平泉山荘が詠まれ、かつ白居易によっても詠まれ、文殊菩薩の言葉として東アジアに広まり、一部で仏教的な別業の名称として受容され、清衡も平和を願うための別業としてこの地に平泉と命名したと想定できること、などを析出した¹¹⁾。平泉のルーツ中国においても、平泉は湧き水と同根であり、ロケーションの基本であることがわかる。またその思想の淵源は、古代中国の理想郷崑崙山山頂の平泉に求められることなど、課題 a) における卓論といえる。崑崙山の山頂は仙人が住み、穏やかな清水が湧くところであったからである。

これら課題 a)・b) の成果を承けて、筆者は中国梁村溝平泉寺(写真1)や中国庭園の現地踏査を踏まえながら、i) 中国での平泉は元来が伝説上の聖山崑崙山にある理想郷であった。ii) それが次第に山中の楽園観に転じ、さらに隠遁空間に転じて、隠れ家の別荘となったこと、iii) わが国の平泉

8) 佐々木邦世 1999 『平泉中尊寺—金色堂と経の世界』吉川弘文館 pp.185-186. この著作で、平泉地名について、白山平泉寺との関わりや平清水(ひらしみず)地名との関わりなど、別の観点から地名問題を紹介している。ことに各地にのこる「ひらしみず」地名に注目した点は独自である。

9) 前川佳代 2001 「平泉の苑池—都市平泉の多元性—」『平泉文化研究年報』第1号 pp.59-70.

10) 小野祐貴 2003 『東国平泉—白山信仰と共に世界遺産へ』(私家版、北上市) pp.9-18.

11) 藪 敏裕 2013 「平泉起源考」『平泉文化の国際性と地域性』汲古書院 pp.5-20.

概念は、白居易に関する詩文や前述 i)・ii) の観念等々を含めた総体として見てよいこと、iv) 中国における元来の平泉は別荘（別業）なので、清衡の宿館も当初は別荘と理解すべきこと、v) 語源の平らな泉には元来波風の立たない世界の意味があり、清衡の目指した争乱のない穏やかな世界こそ平泉命名の理由でもあること、vi) 清衡の平泉命名の時期は、清衡晩年の中尊寺が整備される段階と考え、ことにも中尊寺落慶供養願文作成期と地名命名が一体性をもつ可能性があること、vii) 地名の読みは、はじめは音読みヘイセンであり、訓読みヒライズミは後出的であること、など課題 c)・d) も視野に入れた見解を述べた¹²⁾。後半は藤原清衡と願文起草者藤原敦光との関係性を考慮すべきとする指摘でもある。



写真1 中国梁村溝平泉寺

最近、前田速夫氏は「平泉地名と牛首地名」と題するノートで、みちのく平泉地名は越前の白山平泉寺に因むもので、修験集団が遠く奥州まで進出した結果命名されたとし、平泉という地名は、はるばる越前から奥州まで旅をしたのだと述べている¹³⁾。課題 b) に対応する見解だが、奥州平泉地名の白山平泉寺由来譚は、巷間に古くより流布するもので¹⁴⁾、これに従えば平泉藤原氏の存在は客体的にならざるを得ない。

(3) 白山平泉寺の研究動向

奥州平泉の名称を考えていく上で、白山平泉寺と白山信仰に関する研究動向を無視することはできない。ただし、これには膨大な研究の蓄積がある。ここでは委細を尽くせないので、平泉隆房氏の論考「白山信仰研究の現状と課題 (一)」によって概略を見て行く¹⁵⁾。

氏の論点は多岐にわたるが、当面の関心事に従って、白山信仰のルーツ伝承「泰澄和尚」問題と平泉寺の成立に焦点を当てて見て行く。

白山信仰と白山開山の泰澄に関して記した根本史料は『白山之記』と『泰澄和尚伝記』であることは周知のところである。しかし、その全文が成立当初のものかも含めて検討の余地があるとされる。例えば『白山之記』の全文が長寛元年（1163）の成立かは疑問で、むしろ前半は長寛元年の成立で、後半の説明は室町期の成立だとする説を紹介している。また、一般に奈良時代成立とされる『泰澄和尚伝記』の成立も、諸氏の研究では泰澄の事跡は、平安時代以後に作為されたもの、という説を紹介して、泰澄研究は『伝記』が根本史料となるだけに、その信憑性の問題は避けて通れない課題だと指摘する。

12) 伊藤博幸 2013 「『平泉』地名の由来」『いわて文化財』第255号 p6. 同 2014 「『平泉』思想と藤原清衡」『平泉文化研究年報』第14号 pp.25-30. 同 2015 「日本国内における『平泉寺』について—平泉地名と平泉寺」『平泉文化研究年報』第15号 pp.51-57.

13) 前田速夫 2015 「平泉地名と牛首地名」『地名と風土』

第8号 pp.18-23.

14) その契機は、中世文学『義経記』の流布の影響が強いと考えている。

15) 平泉隆房 2012 「白山信仰研究の現状と課題 (一) —古代中世を中心として」『金沢工業大学日本学研究所 日本学研究』第15号 pp. 1-34.

平泉寺の呼称の問題では、田中卓氏の論考¹⁶⁾を取り上げ、田中氏が指摘した事項、i) 平泉寺の古い呼称は「平清水」「越前国白山」「越前白山社」等で、それは平安時代の文献史料に見えること、ii) 一方、「平泉寺」の語の確実な初見は長寛元年(1163)で、iii) しかも「ひらいずみでら」と発音していたことが『伊呂波字類抄』によってわかること、iv) そして延暦寺末となった際に、それまでの「平泉」に「寺」を付けたことが推定され、v) そのことから逆に「平泉」も、「平清水」とともに古くからの呼称であったことがうかがわれること、などを紹介し、従来、寺か神社かがはっきりせず、ややもすれば泰澄の時代から平泉寺といていたかのような議論も広く行われてきたが、ここに決着した、と結論付けた。

以上、平泉地名の問題をめぐる学説史を概観してきた。これより課題 a)・b) については太田・高橋・前川・小野・藪の諸氏によってかなり深められてきたことがわかる。一方、課題 c)・d) については、高橋富雄氏が指摘して以来、筆者が考察を加えるまで、誰も触れることなく推移してきたことも明らかになった。

また、平泉寺の呼称の問題については、白山平泉寺の成立の問題と併せて、筆者も検討を行ったことがあり¹⁷⁾、田中卓氏の論考が卓見であることが確認できる。次章では、課題 c)・d) を中心に考えてみる。

2. 平泉地名と平泉寺の呼称問題

(1) 奥州「平泉」地名

奥州の平泉地名が史上に登場するのは、『吾妻鏡』文治3年(1187)10月29日条「今日、秀衡入道於陸奥国平泉館卒去」が有名で、一般的には平泉の歴史的初見とされる。さらに文治5年(1189)9月23日条の「清衡継父武貞(略)卒去後、伝領六郡(略)、去康保(康和カ)年中、移江刺郡豊田館於岩井郡平泉、爲宿館」という記事から、その地名は藤原清衡当初からあったとするのが通説的理解である。他方、地名としての平泉は初めて衣川を訪れた西行の家集『山家集』の「衣川」を読んだ詞書中の「十月十二日、平泉にまかり着きたりけるに、雪降り、嵐激しく¹⁸⁾(下略)」に見えるので、西行出家直後の12世紀中頃まではその存在を遡らせることができる。

しかし、清衡当初からこの地が平泉といわれていたという確証はない。また、文治5年9月条の江刺郡から岩井郡平泉に宿館を移したという記事は、12世紀末葉頃の知識を清衡代に投影したに過ぎず、後付けの要素が強い。ただし、西行が12世紀中頃に訪問した段階の平泉はヘイセンとともにヒライズミとも呼ばれていた可能性が高い。

(2) 白山平泉寺の呼称について

この問題については、先に検討したことがあるのでそれによって述べる¹⁹⁾。

16) 田中 卓 1992 「白山神社の概要と創祀」『白山神社史』、のち田中卓著作集 11-1 『神社と祭祀』国書刊行会、1994年に再録。

17) 伊藤博幸 2015 「日本国内における「平泉寺」について—平泉地名と平泉寺」『平泉文化研究年報』第15号 pp.51-57.

18) 後藤重郎校注 1982 『新潮日本古典集成 山家集』新潮社 pp.320-321.によれば、詠まれた時期について文治

2年(1186)10月12日説もあるが、現在は出家直後の陸奥行脚の折りと考える説が有力という。ここでは後者に従う。荒木優也 2019 「増幅するイメージ—西行「衣川」詠の成立と享受について」『第19回平泉文化フォーラム資料』岩手県 pp.46-49.では、久安3年(1147)初冬頃かとする。

19) 伊藤博幸 2015 「日本国内における「平泉寺」について—平泉地名と平泉寺」『平泉文化研究年報』第15号 pp.51-57.

平泉隆房氏や田中卓氏が指摘し、また岩井孝樹氏も述べるように『泰澄和尚伝記』の中には、「平泉寺」の名称はまったく登場しないという²⁰⁾。

越前白山社一帯が文献に登場するのは、例えば平泉寺の前身白山社の末寺化について、園城寺と延暦寺が争った事件を記す『本朝世紀』久安3年(1147)4月13日条にも「越前国白山社」「社領字平清水」とあり、「平泉寺」地名はない。

【事例1】

抑、今夜延暦寺僧綱已講等、依門徒訴群参法皇御所白河北殿、尋其由緒、以越前国白山社、可爲延暦寺末寺之由、所訴申也、件社、当時非叡山末寺、園城寺長吏僧正覚宗所執行社務也、而社領字平清水住僧等、依僧正苛酷、猥注寄文、始所寄与延暦寺也、仍有此訴云々。(傍線部筆者注)

延暦寺と園城寺(三井寺)はともに天台宗であるが、天台寺門宗の対立から10世紀末頃に延暦寺山門派と園城寺寺門派の二派に分かれたことは周知のところである。

これによれば、越前国に白山社があり、この段階白山社は延暦寺の末寺にはなっておらず、その社務は園城寺の長吏である僧正覚宗が執行していた。また社領である字平清水には、僧らが居住していた。しかし僧正覚宗の支配は苛酷なので、今後は延暦寺末にしてほしいという訴えである。すなわちこの段階、「平泉寺」という名称はなく、「白山社」「平清水」と呼ばれていたことを確認できる。

同じく『百鍊抄』久安3年4月7日、5月4日条を見してみる。

【事例2】

4月7日。天台僧綱、以越前白山、可爲延暦寺末寺之由、訴申。無裁許。

5月4日。覚宗入滅之後、以白山、可爲延暦寺末寺之由、被仰下事。仁平二九覚宗入滅。

(傍線部筆者注)

短い記事であるが、これによれば4月の段階の延暦寺末寺化の申請は、まだ裁許されていない。したがって、【事例1】の『本朝世紀』においても同様と解される。約ひと月後の5月にいたって白山(社)の延暦寺末寺化は、園城寺長吏僧正覚宗の死後とする裁可が下る。そして覚宗は仁平2年(1152)9月入滅と覚書風に記される。これより越前国白山社の延暦寺末寺化は、仁平2年以後のこととみてよい。ここにおいても地名は「越前白山」「白山」であり、「平泉寺」は出てこない。むしろこの段階では「越前白山寺」になる可能性も秘めていたことが窺われる。

史料上での「平泉寺」の初見は、田中卓氏も指摘したとおり『醍醐雜事記』長寛元年(1163)11月日の左弁官下文である。

【事例3】

一、平泉寺僧徒、院領越前国牛原庄に居住し、所役に従わざるの事。

一、同時に籠居の夜打・強盗の輩、還って当庄を冤凌するの事、(傍線部筆者注)

これより、史料上で推定できる「平泉寺」の名乗りは、仁平2年(1152)から11年後の長寛元年(1163)までの間とみてよい。以後、平泉寺例が軍記文学等に散見されだす。

【事例4】

「城をば燧に構たり。平泉寺の長吏斉明は、木曾が下知に随て、門徒の大衆駆催し、一千余騎にて」

20) 岩井孝樹 2007 「泰澄と白山越前修験道」『仏教芸術』

第294号 pp.64-91.

云々（『源平盛衰記』）

「木曾義仲、身がらは信濃にありながら、越前国火打が城をぞかまえける。彼城郭にこもる勢、平泉寺長吏齊明威儀師、」云々（『平家物語』火打合戦）（傍線部筆者注）

12世紀後半には、天台宗山門派の比叡山延暦寺の末寺化に成功して、越前平泉寺の寺号が寺勢の拡大化とともに、一般化していることを確認できる。仁平2年から長寛元年の間（12世紀第Ⅲ四半期）は延暦寺の末寺化過程でもあり、その中で白山の「平泉寺」が成立していったと考えられる。

ところで、【事例1】の久安元年（1147）段階では、白山において平泉寺と呼ばれた形跡がないことを見た。一方、久安元年は奥州「平泉」に出家後の西行が初めて訪れた年でもある。非常に微妙ではあるが、「平泉」の呼称の文献上の初見は奥州藤原氏の「平泉」が10～20年先行することを指摘できる。

以上、ほとんどが田中卓氏の研究成果の域を出るものではないが、1、2の新知見を加えてみた。

（3）平泉寺の読みについて

前章（3）節で見たように田中卓氏は平泉寺が延暦寺末となった際に、それまでの「平泉」に「寺」を付けたことが推定でき、その際「ひらいずみでら」と発音していたことが『伊呂波字類抄』によってわかるとされた。この読みの指摘は非常に重要である。

『色葉字類抄』『伊呂波字類抄』は平安時代の辞書とされ、前者の3巻本は治承（1177-81）の頃増補、後者の10巻本は鎌倉時代の大増補によるとされる。問題の「平泉寺」は『伊呂波字類抄』第5巻「比」の項の「諸寺 比叡山 平泉寺在越前国²¹⁾」とある。「ひえいざん ひらいずみでら」の読みである。因みに『伊呂波字類抄』第1巻「部」の項では「諸寺付靈驗所 遍照寺 弁財天」の2カ寺を載せるのみで、「へいせんじ」はない。一方、平安時代の『色葉字類抄』には「平泉寺」は立項されていない。

これより「ひらいずみでら」の読みは、鎌倉時代の大増補の際に収載されたことが確実で、平安期にはまだ収載されていないことが判明する。しかし収載されなかったとしても、平安期に「平泉寺」がなかったということにはならないし、むしろ前節では「平泉」や「平泉寺」が12世紀中葉前後には奥州と越前に相次いで成立したことをみてきた。未収載の事情については不明だが、「ひらいずみでら」の成立は「へいせんじ」後、間もなくと考えられる。

ちなみに白山平泉寺遺跡の発掘調査で、遺物の量が増加するのは12世紀からで、この時期に平泉寺の基礎が据えられ、その後、遺物は14世紀中頃に急増していく²²⁾。

3. 中国における平泉と小隱の思想

（1）平泉思想の源流

ここでは第1章（2）節の記述と重複する部分もあるが、中国における平泉思想に焦点を当てて考えてみる²³⁾。

中国における平泉伝承—仙人が住む理想郷—は古く周代まで遡る。西周の穆王（前900年代）の

21) 『伊呂波字類抄』第5巻は「大東急記念文庫善本叢刊 中古・中世篇別巻二」（2015）を用いた。

22) 松村英之 2012 「白山平泉寺旧境内の貿易陶磁—青白磁仏像を中心に—」『第33回日本貿易陶磁研究集会 記録された貿易陶磁発表要旨』日本貿易陶磁研究会 pp.108-112。

23) ここでは主に、伊藤博幸 2014 「「平泉」思想と藤原清衡」『平泉文化研究年報』第14号 pp.25-30。同 2015 「日本国内における「平泉寺」について—平泉地名と平泉寺」『平泉文化研究年報』第15号 pp.51-57. によった。

事跡を記録した『穆天子伝』巻一、巻二には、次のようにある²⁴⁾。

『穆天子伝』巻一：河宗また之を号す。帝曰く「穆満、女（なんじ）に春山の瑤（たから）を示し、女に崑侖の口舎四・平泉七十を詔（つ）ぐ。乃ち崑崙之丘に至り、以て春山の瑤を観る。晦に語を賜う」と。天子命を受け、南に向かいて再拝す。（傍線部筆者注）

河宗（黄河の神河伯の意）が周の穆王満に、春山の瑤を見せ、崑崙山の口舎・平泉七十を示したというが、崑崙山の中に春山の瑤があり、そこには平泉があったことを示唆する。

『穆天子伝』巻二：春山、是れ唯天下の高山なり。（中略）（天子）曰く「春山の澤、水清く泉出る。温和無風、飛鳥百獣の飲食する所、先王の所謂縣圃（けんぼ）するところ」と。（傍線部筆者注）

縣圃とは、神話上の山で、崑崙山の頂上で仙人が住むといわれる所である。

同書巻一、巻二より、崑崙山頂上の春山は、瑤の山であるとともに、水の清い泉が湧き出て、飛鳥百獣が集まる温和無風な仙人の住む地であり、それを「平泉」というのだとする。

これは、伝説上の理想郷の話だが、唐代になるとそれが具体的な場所として現れてくる。

『法苑珠林』巻十三：隋の天台釈智顛、三道寶階を感見すの序。

顛、乃ち居を卜して勝地とす。是れ光所住の北、佛壘山の南、螺溪の源。處すでに閑敞にして、真を尋ね得易く、地平かにして泉清し。（傍線部筆者注）

「地平かにして泉清し」の原文は「地平泉清」である。本書は唐の仏僧釈道世の撰によるものである。智顛は隋の煬帝の支持で、天台山佛壘山の南麓に居地を卜して勝地としながら、天台宗国清寺を創建した。この地は、それ以前は道教の聖地で、「地平泉清」と呼ばれていた。すなわち天台山以前の当地は平泉であった。古くより人々の信仰を集めた山岳霊場が、神仏信仰に際しても取り込まれる様相を見ることができる。これは、穆天子伝の内容を天台山に具現化したものとも解され、古代に成立した平泉思想は、やがて唐代に至って宰相経験者らによって、別業として具体化されてゆく。

ところで『法苑珠林』は実は「宋版一切経」の一部として中尊寺に伝わっている。同寺編図録によれば巻43・76・81などがある²⁵⁾。奥州藤原氏は宋版一切経を入手し、それを繙きながら天台山と平泉名称との関係を承知していた可能性が考えられる。

（2）白居易と「平泉」

白居易と「平泉」の関係を概観する。

『白氏文集』巻57に「早夏、遊平泉廻」と「遊平泉贈晦叔」と題する詩歌がある。前者は初夏の平泉は南風が吹き、草木香り、頗る平穩、澗路（谷水の意）は甚だ清涼云々、後者は同じく平泉に遊んだ白居易が友人崔玄亮（晦叔は字）に贈った詩歌で、ともに平泉を愛でている。

一体に白居易の住む洛陽履道里から平泉荘までは30里（中国1里＝約500m）あるという²⁶⁾。途中には伊河が流れ、それに沿って龍門石窟があり、対岸には白居易の建てた香山寺がある。彼は年4回は訪れるという詩歌も作っている。

この当時平泉には、李徳裕をはじめ歴代宰相の別荘があり、白雪が積もったように噴出する泉もあり、洛陽の景勝地でもあった。李徳裕の平泉荘は周囲10余里に及ぶという別荘であった。

24) 中国側文献については、劉海宇 2014 「中国古代の文献史料に見える洛陽の平泉」『岩手大学平泉文化研究センター年報』第2集 pp.188-204. に負うところが大きい。学恩に感謝する。

25) 中尊寺編 2010 『中尊寺』 pp.86-87.

26) 中国平泉の現地情報は、李徳方・劉海宇 2013 「洛陽平泉山荘遺址考古踏査略報」『岩手大学平泉文化研究センター年報』第1集 pp.29-39. に詳しい。

晩唐の高駢『劇談録』には「洛陽の平泉荘は、城内から三十里の距離にあり、草木、楼台は神仙の地に来たかのような。透かし彫りの欄干の前には泉水を引き込む。泉水がめぐり流れるさまは、あたかも巫峡、洞庭湖、巫山十二峰から九条の流れとなって海にまで至る、江山の風景のすがたである。」と述べられ、宋代の張洎の『賈氏談録』にも、同様の記述が見える。

白居易と「平泉」の関係において、両者を媒介するのが李徳裕の平泉荘であったといえる。

(3) 平泉小隠

写真2・3は清代の庭園で、蘇州古典園林と呼ばれる「蘇州耦園」の庭園建物内部の軸物及び対面建物正面に架る額銘文である。軸物には「卜築平泉負令名」(写真2)、額には「平泉小隠」(写真3)とある。

この2つの事例は卜して築いた「平泉」が令名(嘉名)を負うということ(本章第(1)節の天台僧智顛の「居を卜して勝地とす」を想起されたい)、「平泉」が「平泉小隠」というひとつの熟語でも呼ばれることがあることを示す。すなわち中国においては清代に至っても、このような「平泉思想が」住まいや庭園作りの中に生きていることを示すと解される。

白居易は「小隠」について洛陽で作られた『中隠』と題する詩にいう。川合康三氏の解説によって見て行く²⁷⁾。

大隠住朝市、小隠入丘樊(大隠は朝市に住み、小隠は丘樊(きゅうはん)に入る)
 丘樊太冷落、朝市太囂誼(丘樊は太(はなは)だ冷落、朝市はただ囂誼(ごうけん))
 不如作中隠、隠在留司官(如かず中隠と作(な)りて、隠れて留司(りゅうし)の官に在るに)
 大意は、大隠は町の真ん中に住み、小隠は山の中に住むもの。しかし山の中は寂しすぎるし、町の中はうるさすぎる。中隠となって分司東都という名ばかりの官に在るのがよい。

「小隠」は人の世を避けて山中に隠れ住む隠逸。「大隠」はそうした生活形態を超越して、市中にあって全うする隠逸。「中隠」はその中間ということでもない。「中隠」の「中」たるゆえんは、官でもあり隠でもある、あるいは官でもなく隠でもない、官と隠の中間に位置することだという。白居易の隠



写真2 中国蘇州耦園の「卜築平泉負令名」



写真3 中国蘇州耦園内の「平泉小隠」

27) 川合康三 2010 『白楽天一官と隠のはざままで』岩波新

書 pp.192-199.

逸の理想だとする。

おわりに

わが国平泉地名のルーツは、唐代李徳裕の別業平泉山荘に行き着く。これはすべての研究者に共通する事項でもある。その理想形は平安初期に将来された白居易の『白氏文集』に求められる。その意味で平泉思想史には、東アジア的観点からの研究を推し進める必要があり、中国・朝鮮との関係の視角が不可欠といえる。将来的には「平泉思想」も東アジア世界形成のメカニズムの中で捉えるべきであろう。

さて、10～12世紀初頭頃まで、この地は広域「衣川」の地であり、12世紀中頃になって「平泉」地名が成立していることを確認してきた。したがって命名の時期はこの間に収まり、それは藤原清衡が豊田館からこの地へ移って命名したものである。

清衡の奥州「平泉」命名の動機は、中尊寺をはじめとする彼の造寺・造仏に対する基本的スタンスと一致し、戦乱のない平和な世界を願うための別業（清衡宿館といわれたもの）としての建立にある。その名称がこの地に新たに名付けられた「平泉」である。平泉の原義は「地平泉清」という意味だからである。

奥州に将来された当初の「平泉」は漢音「ヘイセン」で間もなく和訓「ひらいずみ」に置換されたと推定できる。その実例は、すでに見たようにこの時期の「平泉寺＝ひらいずみでら」にある。言うまでもなく、藤原氏の居館「平泉館」は、「平泉」命名以後の話であり、従来この辺りが倒錯したまま使用されてきた。

清衡の平泉名称の原義が強く意識されたのが、有名な「中尊寺落慶供養願文」で、「平泉」の命名時期は、おそらく願文草案作成時期と差はないと考える。草案作成者文章博士藤原敦光は、願文中に白居易の詩句を引用しており、「平泉」の由来も熟知していた。中尊寺落慶供養願文と地名の命名が一体性をもつ可能性を考える所以である。

「平泉」の本源は、「隠れ里」「人里離れたところ」という一種の理想郷であるが、清衡は実際の現実の場に理想の郷を築こうとしたといえよう。清衡は混乱した世界を鎮め、一族郎党が平和に暮らせるコミュニティを創ろうとしたのである。清衡による「計画的に造られた理想郷」―それが「平泉」であった。

ところで、奥州「平泉」地名の白山平泉寺移入説であるが、奥州藤原文化は仏教美術・工芸、生活様式まで京文化や東アジア文化をモデルに積極的に取り入れながら、独自の「平泉文化」に昇華させていったことは周知のところである。移入説ではなぜ、地名だけ白山なのか、白山から受け入れたその理由を説明すべきであろう。つまり、「平泉文化」は奥州平泉における景観も地勢も含めた有形・無形の文化の総体として見るべきものなのであり、地名も「平泉文化」の中の一つの属性なのである。

以上、「平泉」地名は藤原清衡が自ら願って命名した「嘉名（令名）」であるということを指摘して擲筆する。

最後に、供養願文の起草者藤原敦光が欠員となっている陸奥守に任じられんことを申請した話はあまり知られていない²⁸⁾。結果的に敦光は陸奥守に任じられなかったが、その申請動機の背後に自らが関与した「中尊寺落慶供養願文」の存在を想定することは許されるであろう。清衡没後7年後のことである。

28)『本朝統文料』（巻六 奏上）「正四位下式部大輔藤原朝臣

某誠惶誠恐謹言」（保延元年〈1135〉6月日）

A Study on Fujiwara Kiyohira and Heisen Thought

ITO Hiroyuki

A Study regarding the geographical name of Hiraizumi(Hiraizumi,Iwate Prefecture) during the Middle Ages and my thoughts about the origin and principles of naming during that era from a historical perspective.

The name of Hiraizumi itself, has to date, not been sufficiently examined. Before it came to be known as Hiraizumi, the area had been known as Koromogawa or Kinugawa since ancient times. When the first Kiyohara of the Oshu Fujiwara made a political and religious base in the southern end of the Koromogawa region, it is my belief that it was named Heisen (平泉). The meaning of the name is calm world with no winds which refers to the idea of peace without war and the desires of the world. Further, we can trace the origin of the name back to Luoyang(洛陽) Heisen, China, where it referred to a mountain cottage or “Heisen Sanso (平泉山莊) ”.